

漢詩「鬼界島」論——訳詩集『於母影』に於ける市村瓊次郎の試み——

安川 里香子

キーワード 鬼界島 市村瓊次郎 『於母影』

要旨

明治三二年、新声社の人々が世に問うた訳詩集『於母影』は、徳富蘇峰『国民之友』の〈新しき詩、新しき詩人よ、出でよ！〉との呼びかけに応じたものであった。

『於母影』中の大部分が西欧文学を原典としているが、中で市村瓊次郎作の長編漢詩「鬼界島」だけは、わが国の古典『平家物語』に拠っている。

『於母影』に収められた各々の作品には、どれも「憧れ」「夢想」「(時には悲哀に満ちた)ドラマ」「叙情性」といった、近代的なロマン主義の文学の要素が、意図的に採り上げられている。また、リズムを持たせるために、多くは漢詩形を採っている。専攻研究には西欧文学との比較論が多くあるが、「鬼界島」に関する論文は寡聞にしてあまり見かけない。

拙稿では一九六句に及ぶ長編漢詩「鬼界島」を全十段に分けて分析し、右のテーマがどのように生かされたか、また、

題辞とどのように呼応しているのか、市村瓊次郎の意欲的な試みについて述べる。

序論

市村瓊次郎¹作漢詩「鬼界島」は訳詩集『於母影』²中の一編である。『於母影』はS. S. S. (新声社)の署名で発表され個々の氏名の記述はないが、主宰者鷗外森林太郎³の上野花園町の自宅に参集した顔ぶれは、井上通泰³・落合直文⁴・市村瓊次郎⁵・画家原田直次郎⁵・鷗外の弟篤次郎⁶・妹喜美子⁷等であった。後年、鷗外は『改訂水沫集』⁸序文の中で、「於母影」について次のように述べている。

おもかげ。何の方鍼もなく取りて、何の次第もなく集めたるものなれど、社中の人々がしのばすの池に臨める楼上に夜を徹して、此の一卷を編み成しし時を憶ひ起せば、

毎編毎関毎句毎字、一として深き感慨の媒ならぬはなし。
就中 ^{カブリ}Capri 島上の喇叭の響を伝へし落合直文氏のみは、
早くも亡きひとの数に入りぬ。

鷗外はいささかの含羞と共に感慨を込めて「何の方鍼もな
く取りて、何の次第もなく集めたるもの」と述べているが、
「新声社」という名に徴しても、その目的は明らかである。

『於母影』の目的は、「今の時代に相応しい、今の時代のこ
とばでの詩歌を！」と提唱した『新体詩抄』の、そして後年
更にそれを引き継いだ徳富蘇峰の「新しき詩、新しき詩人よ、
出でよ！」との呼びかけに応じたものであった。それはやが
て明治三十年、島崎藤村の『若菜集』にその精華をみるこ
とになるが、その八年前に発表された『於母影』が、明治の
新体詩を生む母体になった意義は大きい。『於母影』は、和
語・漢語の長所をいかしつつ、西欧的な情緒を盛り込むとい
う、いわば新体詩の実験を世に問うた詞華集^{アソロジー}であった。これ
が『国民之友』に掲載されるや大変な反響を呼んだ。多くの
詩歌愛好家が熱狂したのは『於母影』の中に、まだ見ぬ西欧
の清新な香りを感じ、その瑞々しい詩語に彼らの中のロマン
が刺激されたからに他ならない。『いざ、彼方へ！』という
わけである。

ところで、『於母影』の詩歌の大半は西欧文学を原典とし

ており（ドイツ文学十一・英文学四・明漢詩一。のち、『水
沫集』再収時にドイツ一・明一を追加）、日本文学から「鬼
界島」一編を収めている。目次には、各詩歌の題の下に国名、
その下に（意）（句）（韻）（調）の区分があり、これらの末
尾に、

（意） 従原作之意義者

（句） 従原作之意義及字句者

（韻） 従原作之意義及韻法者

（調） 従原作之意義字句及平

仄韻法者

の注が付いている。

『於母影』については、すでに多くの先行論文があるが、
その大部分は西欧文学との比較研究であって、詳細な「鬼界
島」論は寡聞にしてそう多くは見受けられない。

拙稿では、市村瓊次郎（以下、市村と略す）が「鬼界島」で、
漢語を用いてどのような新体詩を試みたのか、そしてどのよ
うな形で『於母影』の叙情性の一翼を担ったのかを考察する。

本論 漢詩「鬼界島」

（その一） 典故

「鬼界島」は『平家物語』を原典としている。『平家物語』
には流布本はじめ諸本があるが、『森鷗外・於母影研究』¹⁰の調

査では、市村が典拠にしたものは八坂本¹⁾としている。その根拠としての例を一、二挙げれば、詩中の「アリオウ」を「有王」ではなく「蟻王」としていること、俊寛の娘の年齢を、諸本の大部分が十二歳としているのに「十三歳」としていること、本詩中の「少女聞之喜且泣、千行紅淚筆々湿」に該当する「御文、あそばすとて、一筆、あそばしてはうつぶし、一筆遊ばしては、うつぶし、斜めならず、むづからせ、おはしまし、候ひつるが、扱は、御涙の、か、らせ、給ひたるらんにては、候らん」が八坂本以外の諸本には見あたらない、などである。これらから『森鷗外・於母影研究』グループは、市村は漢詩「鬼界島」を、国民文庫本を原拠として創作したと推定している。国民文庫は内閣文庫蔵慶長書写城方本を底本に、明治四十四年、古谷知新校訂で翻刻刊行された。

(その二) 構成

『於母影』の目次九番目に、

鬼界島……平家物語……(意)

とあり、

(意) 従原作之意義者

とある。つまり、原作の趣旨内容を伝える〈意〉訳である。

この詩は、全一九六句からなる、長編の七言古詩である。

拙稿では内容上から、全体を十段に分け、その各々に書き下し文と語句の意味、平仄及び韻、簡単な注を施した。なお、詩中の漢字は可能なものは新漢字に改めた。

(その三) 解釈

第一段

鬼界之島在何処	雲濤浩渺不可渡
五穀不生田土瘦	山谷深沮多大樹
維昔治承戊戌秋	平氏威權加八洲
王家未免式微嘆	天子下堂見諸侯
慷慨有人聚壯士	夜深鹿谷誓生死
何物狡兒泄秘謀	一朝縲囚百事止
三人同謫孤島中	蛮烟瘴雨又蠻風
雄心寂寞消磨尽	身如断梗髮似蓬
誰識禍福与时転	又見流人蒙赦免
遺恨千年天無情	尚有僧都留不返
北望黯然魂欲消	浮雲積水路超々
濤声入枕眠不得	憂心耿耿度永宵

鬼界の島は何処にか在る／雲濤浩渺として渡るべからず

五穀生ぜず田土瘦せ／山谷深沮 大樹多し
 維昔 治承戊戌の秋／平氏の威權 八洲に加はり

王家未だ式微の嘆を免れず／天子 堂を下りて諸侯に

見ゆ

慷慨 人有り 壯士を聚め／夜深 鹿谷に生死を誓ふ

何物ぞ 狡兎 秘謀を泄し／一朝 縲囚せられ百事

止む

三人同じく謫せらる孤島の中／蛮烟瘴雨 又蠻風

雄心寂寞として消磨し尽くし／身は断梗の如く髪は

蓬に似たり

誰か識る 禍福の時と与に転ずるを／又見る 流人

の赦免を蒙るを

遺恨千年 天無情／尚ほ僧都の留まり返らざる有り

北のかた望めば黯然として魂消えんとし／浮雲積水

路超々

濤声枕に入りて 眠り得ず／憂心耿耿として永宵を

度る

語句

・鬼界島：九州南方諸島の古称。罪人を島流しにした。「平家物語」(長門本)では、今の薩南諸島から沖縄まで十二島。

一説に鹿児島県大隅諸島の硫黄島を指し、能楽「俊寛」はこれに従う。ここも硫黄島に設定している。・浩渺：広くはるかなさま。「邵氏聞見録」五嶽崢嶸、崑山出玉、四溟浩渺、

麗水生金。・深沮：深くはばむ。「沮」ははばむ。・治承戊戌

秋：治承二(一一七八)年七月、中宮徳子の安産祈願のため、

鬼界島の流人に赦免が出たこと。「平家物語」卷三「ゆるし

ふみ」に拠る。・式微：国勢などがはなはだしく衰えること。

「詩経、邶風、式微」式微式微、胡不帰。・慷慨：治承元年の

鹿ヶ谷の平家討伐の謀をさす。・狡兎：ずる賢い人物。多田

蔵人源行綱を指す。・縲囚：罪人が縛られること。「縲」は罪

人を縛る黒縄。・三人：俊寛・平康頼・藤原成経を指す。・

蛮烟瘴雨：瘴気を含むけむりと雨。「瘴雨蛮烟」に同じ。「嚴

羽、答友人詩」湘江南去少一行、瘴雨蛮烟白草生、誰念梁園

旧詞客、桄榔樹下独聞鶯。・蛮風：南方の蛮人の風習。・断

梗：根を切られたいばら。ふらふらして定まらないさま。「元

好問、出京詩」半生無根著、飄転如断梗。・流人蒙赦免：康

頼・成経の二人が赦免になったことを指す。俊寛は赦免され

なかった。・黯然：一、くらいさま、また、黒いさま。二、

心が鬱屈して晴れないさま。「柳宗元、別舎弟宗一詩」零落

残魂倍黯然、双垂別涙越江辺。・耿耿：寝られないさま。「楚

辞、遠游」夜耿耿不寝兮。

平仄：仄起式で始まる。

韻字：渡・樹、去声7遇。洲・侯、下平11尤。死・止、

上平4紙。風・蓬、上平1東。免・返、踏み落し。超・

宵、下平2蕭

注 … 一句目の第二文字「界」は仄字なので、仄起式で始

まる。また、偶数句ごとに押韻し、四句ごとに仄と平の脚韻
が入れ替わる換韻の形（古詩の韻法の一）をとり、四句ごと
に場面が展開していく。以降の各段でもこれを踏襲している。

第十八句末「免」（上声16銑）と第二十句末「返」（上声13阮）
は韻が揃わない所謂「踏み落し」だが、これは前後の平仄に
支配されたものであり、共に仄字で揃えていて許容される。

ただし、古詩においては平仄はさほど厳密ではない（以下の
各段も同様）。

冒頭の四句を仄起韻で始めて「鬼界島」の不毛の地の暗さ
が、音声的に暗示される。其処に流罪になった三名の中でた
だ一人、赦されない俊寛の苦しさや望郷の思いが語られる。

第二段

京師蟻王果何者 僧都恩遇尚所荷

偶聞流人蒙赦飯 窃喜僧都亦免禍

簑笠出迎鳥羽村 烟雨空濛昼尚昏

但見二轎向京至 不見僧都空断魂

聞道罪深歸不得 余生尚托蛟龍域

向人数々問帰期 帰期何日絶消息

京師の蟻王果たして何者ぞ／僧都の恩遇尚ほ荷なふ

所

偶たま聞たまく 流人の赦を蒙りて飯かべるを／窃ひそかに喜ぶ僧

都も亦禍を免れんと

簑笠さりふ出でて迎むかふ 鳥羽の村／烟雨空濛 昼尚ほ昏くらし

但だ二轎の京に向ひて至るを見るのみ／僧都を見ず

して 空しく魂を断つ

聞道きくみち 罪深くして帰るを得ず／余生尚ほ蛟龍の域に

托せらると

人に向ひて数々帰期を問ふも／帰期何れの日か 消

息を断つ

語句

・簑笠…みのとかさ。ここは、赦免された流人を、人目に付

かぬようにして出迎えた蟻王の、簑笠を着けた旅姿を指す。

「詩経、小雅、無羊」爾牧来思、何簑何笠。・二轎…康頼・成

経の乗った二丁の輿。「轎」は竹で編んだこし。・向…方向を

表わす助字。・蛟龍域…鱗のある龍のいる恐ろしい場所。こ

こは鬼界島を指す。

韻字 … 荷・禍、上声20哿。昏・魂、上平13元。域・息、

入声13職。

注 … この段も仄韻で始まり仄韻で終わり、蟻王の期待の虚しさが暗示されている。第十一句末と第十二句初に「帰期」が繰り返されている。詩中に同じ語は使用しないのが原則だが、この例のようにその語句を強調する場合は認められている。

第三段

僧都有女年十三 山桜経雨紅半含
零落孤身托何処 南都城裡古茅庵
茅庵雨歇風日美 满地落花無声賦
門前乍聴響蹙然 即是蟻王尋女至
相見未語淚先垂 但道赦免不可期
欲向海南問消息 請君試写相思辭
少女聞之喜且泣 千行紅淚筆々湿
欲封又開開又封 慇懃相托更嗚咽

僧都に女有り年十三／山桜雨を経て 紅半ば含めり
零落孤身 何処に托す／南都城裡 古茅庵
茅庵 雨歇み風日美しく／满地の落花 声無くして
門前に乍ち聴く 蹙然たる響きを／即ち是れ蟻王の
女を尋ねて至るなり
相見て未だ語らざるに 涙先づ垂る／但だ道ふ 赦

免期すべからず

海南に向ひて消息を問はんと欲す／請ふ 君 試みに相思の辞を写せと

少女之れを聞きて 喜び且つ泣き／千行の紅涙 筆々湿れり

封せんとして又開き 開きては又封し／慇懃に相托して更に嗚咽す

語句

・山桜云々：俊寛の娘の初々しい色香の形容。・賦：なめらか。「楚辞、招魂」靡顔賦理。「注」賦、滑也。・蹙然：足音のさま。「莊子、徐無鬼」聞人足音蹙然而喜矣。・嗚咽：むせびなく。しゃくり泣く。「江淹、泣賦」泣嗚咽兮染衣。

韻字 … 含・庵、下平13覃。賦・至、去声4寘。期・辞、上平4支。湿・咽、入声14緝。

注 … 冒頭、俊寛の娘の愛らしさが平韻で表現される。その娘の悲しみに泣くしおらしい様子が終句仄韻で示される。

第四段

江南四月草萋々 千山花落杜鵑啼

春色已婦人未返 暮雲遠樹魂轉迷

孤身直欲報恩遇 菽水奉歡寧違願

行李蕭然出鄉関 独上蒼茫雲海路

雲海蒼茫一葉舟 雲渺々兮水悠々

唯一封藏髻裡 海上自防萑苻憂

任地形容太枯槁 行尽西海万里道

又從薩州托賈船 布帆無恙達孤島

江南四月 草萋々／千山花落ち

杜鵑啼く

春色已にして 婦人未だ返らず／暮雲遠樹 魂轉た

迷ふ

孤身 直ちに恩遇に報いんと欲す／菽水歡を奉ず寧

ぞ顧みる違あらんや

行李蕭然として郷関を出で／独り上る 蒼茫雲海の

路

雲海蒼茫 一葉舟／雲は渺々 水悠々

唯だ一封有り 髻裡に藏す／海上自ら防ぐ 萑苻の

憂

任地の形容 太だ枯槁／行き尽く 西海万里の道

又薩洲より賈船に托し／布帆 恙無く孤島に達す

語句

・草萋々：草が盛んに生い茂っているさま。「漢書、外戚伝」

中庭萋兮綠草生。「注」青草貌也。・杜鵑：ほととぎす。蜀王

杜宇の魂が化してこの鳥になったという。ほととぎすには子

規・子鳥などの他、「不如婦去」や「催婦」の字を当てるこ

ともある。この第二句目は、ホトトギスの鳴き声が季節を表

わすとともに「僧都（俊寛）の帰京を促す声」として暗示さ

れ、次の第三句目を導いている。「本草、杜鵑」時珍曰、蜀

人見鵑而思杜宇、故呼杜鵑云々。・已：やむ。すでに。「已」

に同じ。「正字通」已、吳棫曰、古已午之已、亦讀如已矣之

已、云々。・転：うたた。いよいよ。「李白、春夜宴桃李園序」

高談軒清。・菽水奉歡：豆や水を飲食して貧しく暮らしなが

らも、親に孝養を尽くして、その心を喜ばせること。「菽水」

は豆（粥）と水。極めて粗末な飲食物の喩え。「礼、檀弓下」

子路曰、傷哉貧也、生無以為養、死無以為礼也、孔子曰、啜

菽飲水、尽其歡、斯之謂孝。・髻：もとどり。・萑苻：沢の名。

荻や蒲等が密生していたことからいう。隠れやすいので常に

盗藪となる。「萑苻之盗」は藪沢に隠れて悪事をする盗賊。「左

氏、昭、二十」鄭國多盜、取人於萑苻之沢、大叔悔之曰、吾

早從夫子、不及此、興徒兵、以攻萑苻之盜、尽殺之、盜少止、

仲尼曰、善哉。・枯槁：しばみかれる。草木が枯れる。・賈

船：商船。「賈」は商い。

韻字：啼・迷、上平8齊。顧・路、去声7遇。悠・憂、

下平11尤。道・島、上声19皓

注 … この段は季節の美しさ、蟻王の前途への期待や勇み心が表現されており、全体的に明るい。

第五段

島中風景異京華 不見田園種桑麻
芳草滿郊青漠々 一路荒村落日斜
逢人輒問僧都跡 言語不通手加額
誰知京洛寺門僧 今作天涯淪落客
中有一人能解心 言是前日沢畔吟
不知今日在何処 須向峰巒深処尋
山高谷深行路窄 嵐氣襲人天欲夕
一徑窮処荆棘深 晚風淒々乱雲白
輒歩更向海辺行 路上沙清鳥迹明
四望蒼然人不見 烟波深処海鷗鳴

島中の風景 京華と異なり／田園に桑麻を植うるを見ず

芳草郊に満ち 青漠々／一路の荒村 落日斜めなり
人に逢へば輒ち問ふ 僧都の跡／言語通ぜず 手額に加ふ

誰か知る 京洛寺門の僧／今天涯淪落の客と作るを

中に一人有り 能く心を解す／言ふ 是れ前日沢畔に吟ぜしも

今日何処に在るやを知らず／須らく峰巒深き処に向かひて尋ぬべしと

山高く谷深くして 行路窄し／嵐氣 人を襲ひて天 夕べならんとす

一徑窮まる処 荆棘深く／晚風淒々として乱雲白し歩を輒じて 更に海辺に向かひて行けば／路上 沙清く鳥迹明なり

四望蒼然 人を見ず／烟波深き処 海鷗鳴く

語句

・淪落…おちぶれる。零落。・峰巒…山々。幾重にも連なつた山。・嵐氣…蒸し潤つた山の気。もや。「淮南子、墜形訓」瘴氣多暗、嵐氣多聲。

韻字 … 麻・斜、下平6麻。額・客、入声11陌。吟・尋、下平12侵。夕・白、入声11陌。明・鳴、下平8庚。

注 … 鬼界島の風景の珍しさ、蟻王の期待と不安が交互に描かれている段である。

第六段

乍認老翁来海上 倚杖大息气惨愴
 瘦臂倒提数尾魚 破衣乱髮無人状
 相逢先問僧都蹤 寧料僧都是老翁
 兩人相对掩顔泣 談今話昔感無窮
 謝汝能凌淼漫海 万里来尋忘身殆
 回首往事都如夢 欲死未死身猶在
 唯頼婦人懇慰余 荏苒久待京師書
 飛雁不來天地長 幽憂之裡送居諸
 島中固不事稼穡 幾為衣食勞身力
 瘴烟深処採硫黃 売与商人換衣食
 爾来身力日愈衰 不踏窮山僻水危
 時從漁人請魚去 又拾蚌蠣充調飢
 天涯誰復憐落魄 蕭然独結環堵宅
 從此与汝携手去 通宵交膝話今昔

乍ち認む 老翁の海上に来たるを／杖に倚り大息し
 て 气惨愴たり

瘦臂もて倒しまに数尾の魚を提げ／破衣乱髮 人無

きが状なり

相逢うて 先づ僧都の蹤を問ふに／寧ぞ料らん僧都

は是れ老翁とは

兩人相对して 顔を掩ひて泣き／今を談じ昔を話し

て感窮まり無し

謝す 汝の能く淼漫たる海を凌ぎ／万里来たり尋ね
 て 身の殆きを忘るるを

首を回らせば 往事は都て夢の如し／死なんと欲す
 れど未だ死なず 身猶ほ在るなり

唯だ婦人の懇ろに余を慰めしを頼み／荏苒久しく京
 師の書を待てども

飛雁来たらず 天地長く／幽憂の裡に居諸を送る
 島中固より稼穡を事とせず／幾ど衣食の為に身力を

勞せり
 瘴烟深き処 硫黄を採り／商人に売りと与えて 衣食
 に換ふ

爾来 身力日に愈よ衰へ／窮山僻水の危ふきを踏まず
 時に漁人より魚を請ひて去る／又蚌蠣を拾ひて飢え

を調ふに充つ
 天涯 誰か復た落魄を憐れまん／蕭然として 独り

環堵の宅を結ぶ

此より汝と手を携えて去り／通宵膝を交へて今昔を
 話さんと

語句

・惨愴…いたましく悲しいさま。・淼漫…江海の広く際涯の

無いさま。「陶弘景、水仙賦」淼漫八海、汨汨九河。・婦人：ここは赦免された成経を指す。・荏苒：歲月の長引くさま。のびのびになること。「潘岳、悼亡詩」荏苒冬春謝、寒暑忽流易。「注」善曰、荏苒、猶漸也、苒苒、歲月流貌。・飛雁：手紙。雁書。漢の蘇武の故事。・居諸：日月をいう。詩經邶風柏舟篇の日居月諸の句に基づく。居と諸は助字。「詩、邶風、柏舟」日居月諸、胡迭而微。・稼穡：作物を植えて付けて刈り取るわざ。農業。・瘴烟：毒気を含んだけむり。・蚌蟪：蚌はまぐり。蟪はイナゴ。・環堵：東西南北各一堵の家。転じて、貧しい家をいう。

韻字： 愴・状、去声23漾。翁・窮、上平1東。殆・在、上声10賄。書・諸、上平6魚。力・食、入声13職。危・飢、上平4支。宅・昔、入声11陌。

注： 邂逅した俊寛の悲惨な様子が描かれ、全体として暗い段である。

第七段

乃沿海上海又曳筇 巖辺遙認一株松
松影参差蔽孤宅 草扉竹椽碧苔封
且道秋宵明月色 皎々何意入戸側

夜半時聽風雨声 湿入敗衲身自識
桑門昔日着袈裟 玉殿金樓作我家
滿室香烟長不絶 木魚声裡寄生涯
自古人生似夢幻 江湖何事足憂患
一朝誤作遷謫客 往事茫茫不可諫

乃ち海上に沿ひて又筇を曳く／巖辺遙かに認む 一

株の松

松影参差 孤宅を蔽ひ／草扉竹椽 碧苔封す

且つ道ふ 秋宵明月の色 皎々として何の意ぞ戸の

側に入る

夜半 時に風雨の声を聴き／湿敗衲に入りて身は自

ら識る

桑門の昔日 袈裟を着し／玉殿金樓 我が家と作す

満室の香烟 長へに絶えず／木魚の声裡に生涯を寄

す

古より人生は夢幻に似たり／江湖 何事を憂患する

に足らん

一朝 誤りて遷謫の客と作るも／往事茫茫として諫

むべからずと

語句

・参差：ふぞろいなさま。「韻会」参、参差不齐。・竹椽：竹

のたるき。・敗衲：初出以下、「敗衲」となっているが、「衲」の誤植と思われるので訂正した。「衲」はあわせ。またしとねの意もある。・桑門：出家をいう。仏徒。僧侶。・江湖：世間。世の中。

韻字　：　松・封、上平2冬。側・識、入声13職。家・涯、下平6麻。患・諫、去声16諫

注　：　自然描写と俊寛が華やかだった往時を懐かしむ場面は明るく（平韻）、一方で、廢屋に住む無惨さ・人生の儚さを述懐する場面は暗い（仄韻）。

第八段

言終唯有淚滂滂　此時蟻王亦慘傷
說尽往年多少事　每談一事一悲傷
尚記當年謀泄日　捕卒幾十來入室
奪略家財無所遺　殺人如麻何知恤
此時夫人携兩兒　鞍馬山下去栖遲
有時往來問安否　談到主君便增悲
幼君不解當年事　只喜孤臣左右侍
常道家嚴在遠方　与汝相携到其地
噫吁死生皆是天　幼君何意去茫然

夫人日夕思慕切　又辞人世客黄泉
唯喜令娘今尚健　独赴南都依親近
來時就求一紙書　開髻出書通信問

言ひ終はりて　唯だ涙の滂滂たる有るのみ／此の時
蟻王も亦　慘傷たり

説き尽くす　往年多少の事／每談一事　一悲傷
尚ほ記す　当年の謀泄るるの日／捕卒幾十　室に來たり入り

家財を奪略して遺す所無く／人を殺すこと麻の如く
何ぞ恤れむを知らん

此の時　夫人兩兒を携へ／鞍馬山下に去りて　栖遲せり
時有りて往來し　安否を問ふ／談　主君に到れば便ち悲しみを増す

幼君は　当年の事を解せず／只だ孤臣の左右に侍するを喜ぶのみ
常に道ふ　家嚴遠方に在り／汝と相携へて其の地に到らんと

噫吁、死生は皆是れ天／幼君何の意か　去りて茫然たり
夫人　日夕思慕切りにして／又人世を辞し黄泉の客となれり

唯だ喜ぶ 令嬢今尚ほ健にして／独り南都に赴き親
近に依れり

来時に就きて一紙の書を求めたりと／髻もじりを開きて書
を出し 信問を通ず

語句

・多少事…多くのこと。「少」は助字。・記…覚え(てい)る。
「礼、学記」記問之学。「注」記問、謂予誦雜難雜説云々。
「栖遲」世を避けて田野にあること。「漢書、叙伝」栖遲於一丘、
即天下不易其樂。・家嚴…他人に対して己の父を言う。また
母をも含めていう。家大人・尊家・家嚴・老父。「類書纂要」
自称父曰家君・一紙書…一封の書。「紙」は紙や書簡などを
数えるときの語。

韻字 … 傷・傷、下平7陽。室・恤、入声4質。遲・悲、

上平4支。侍・地、去声4寘。然・泉、下平1先。近・問、
去声13問。

注 … 平と仄を交互に入れ替え、あるじ無き家の様子を俊
寛に報告する、蟻王の気持ちの高下が表現される。

第九段

僧都展書読幾回 書中只道早归来

痿者終身寧忘起 赦恩猶未及藁莱

藁莱之中無曆日 只有氣候分寒熱

花発知春葉落秋 夏聽蟬声冬見雪

三年孤島日遅々 憶起当年被執時

被執寧知為永訣 天涯地角長相思

苦辛不願在人事 一死唯分葬荒裔

絶食兩旬遂易床 海雲慘澹水空逝

時聽蟻王哭泣声 俄隔幽明若為情

孤身豈惜試螻蟻 只当香火祈後生

僧都書を展べ 読むこと幾回／書中に只だ道ふ 帰

来の早からんことをと

痿ぬしや者は終身寧なんぞ起つを忘れんや／赦恩猶ほ未だ藁莱かうらい

に及ばず

藁莱かうらいの中に曆日無し／只だ氣候有りて寒熱を分かつ

のみ

花発ひちけば春を知り 葉落ちれば秋／夏は蟬声を聴き

冬は雪を見る

三年 孤島に日遅々たり／憶ひ起せば 当年被執ひしふの時

被執 寧ぞ知らん永訣えいけつと為り／天涯地角に長へに相

思はんとは

苦辛して人世に在るを願はず／一死 唯だ分つのみ

荒裔くわうえいに葬れと

絶食すること兩旬 遂に床を易かふ／海雲慘憺 水空

しく逝く

時に蟻王の哭泣の声を聴き／俄に幽明を隔てて情を

為すがごとし

孤身あ豈に螻蟻ろうぎを試むるを惜しまんや／只まだ当まに香火

に後生を祈るべしと

語句

・痿者いざり：いざり。・藁菜あれくさ：あれくさ。又、草の茂っているところ。ここは鬼界島を指す。「韓詩外伝、一」原憲居魯、環

堵之室、茨以蒿菜。・被執せし：召し捕らえられたこと。・荒裔あらい

：遠い国土の果て。「後漢書、文苑上杜篤伝」信威于征伐、

展武乎荒裔。・易床えい：臨終。・螻蟻ろうぎ：ケラとアリ。転じてつ

まらないものの喩え。「螻蟻之誠」(自己の誠心の謙辞)に同じ。

韻字 … 来・萊、上平10灰。熱・雪、入声9屑。時・思、

上平4支。裔・逝、去声8霽。情・生、下平8庚。

注 … 俊寛が娘の書簡を読む時の期待と義憤は平韻で、ま

た自然の中で忘れられ無為の生活を強いられている現在を述

べる下りでは仄韻で、さらに絶食死の場面も仄韻で、最後は、

悲しむ蟻王を俊寛の霊が慰め、菩提を弔うように伝える優し

さのあふれた場面では平韻で表現している。

第十段

遺骸空付一炬火 收拾白骨囊裡裏

又整旅装辞孤島 薩摩海上再泛舸

関山秋色満帰途 落日空林啼晚鳥

青鞋踏尽幾險艱 寒風冷雨入南都

旅装直訪僧都女 孤島苦辛相對語

天地有情亦応泣 海内無人解愁緒

可憐当日小雲鬢 一朝削髮入禅関

蟻王亦携白骨去 飄然泣上高野山

高野山高入雲漢 南望蒼海空長嘆

鬼界之島在何処 万古愁雲凝未散

遺骸は空しく一炬火に付し／白骨を囊裡の裏に收拾す

又旅装を整へ孤島を辞し／薩摩の海上に再び舸を泛ぶ

関山秋色 帰途に満つ／落日空林 晚鳥啼く

青鞋せいあ踏み尽くす 幾險艱／寒風冷雨 南都に入る

旅装 直ちに僧都の女を訪ひ／孤島の苦辛 相對し

て語る

天地情有らば 亦ま応に泣くべし／海内 人をして愁

緒を解く無し

憐れむべし 当日の小雲鬢せうくわん／一朝削髮し 禪関に入る

蟻王も亦白骨を携えて去り／飄然へうぜん 泣きて高野山に

上るのぼる

高野山高くして雲漢に入り／南のかた蒼海を望みて

空しく長嘆す

鬼海の島は何処にか在る／万古の愁雲凝りて未だ散

ぜす

語句

安 川 里 香子

・付一炬火…ここは僧都(俊寛)の亡骸を茶毘に付したこと

をさす。・囊裡裏…囊ふくろの中。・舸…ふね。大ぶね。・関山…郷

里の四境をめぐる山。転じて、ふるさと。「徐陵、関山月詩」

関山三五月、客子憶秦川。・空林…木の葉の落ち尽くした林。

人里離れた林。・青鞋…わらじ。・愁緒…憂いの気持ち。・小

雲鬢…ここは俊寛の娘をさす。「雲鬢」は豊かな髪を束ねて

結ったみずら。・雲漢…天の川。天河。天漢。銀漢。「杜甫、

白沙渡詩」差池上舟楫、窈窕入雲漢。

韻字 … 裏・舸、踏み落とす。鳥・都、上平7虞。語・緒、

上声6語。関・山、上平15刪。嘆・散、去声15翰。

注 … 第二・四句は韻が揃わないが、いずれも仄韻によつ

て俊寛の遺骨を抱いた蟻王の暗い気持ちを表している。第

六・八句が平韻なのは、南都に居る俊寛の娘との再会を、蟻

王が期待する気持ちの表れである。そして仏門に入った娘と

同じく高野山に入山した蟻王の場面が平韻なのは、仏門へ帰

依する救済の故かもしれない。

掉尾は冒頭「鬼界之島在何処」をここで再び繰り返すこと

でこの詩が連環し、しかも仄韻で閉じることによって、「万

古愁雲凝未散」と暗い余韻を漂わせながら完結するのである。

(その四) 特徴

このように「鬼界島」は、全一九六句からなる長編の(物語)詩である。散文に近いともいえる。散文の方が漢詩よりも一般に理解しやすい。

その特徴は、

一、中世以来、琵琶法師によつて、あるいは歌舞伎その他

によつて、人々に親しまれてきた「平家物語」の一節を

題材にしており、内容が理解しやすい。

二、易しい漢語を多用しており、殆ど辞書を引かなくても

同時代の人々に直ぐ意味が通じる。

三、古詩にもかかわらず、かなり厳格とも言える換韻格を

採りつつ、仄韻で始まり仄韻で終わる連環法を用いて、

(俊寛の都への) 切ない望郷の思い・彼方への憧れ・見果てぬ夢が語られ、しかもそれらを断念する「諦念」が描かれている。
 などが挙げられよう。

訳詩集『於母影』の大半は西欧文学からの翻案であるが、市村もまた「鬼界島」で漢詩の形で、(今の時代に合った今のことば)の詩を創作し、S. S. S. 新声社の一員として『国民之友』の提唱に寄与したのである。

〔その五〕『於母影』題辞との関わり

ところで、ここで注意しなければならないのは、訳詩集『於母影』の題辞についてである。題辞には次の二首が掲げられている。

陸奥のまの、かや原とほけどもおもかげにして見ゆとふ
 ものを¹² 万葉集
 岷峨天一方 雲月在我側 東坡詩

この二首の題辞が、対の形で掲げられていることに、私達は留意しなければならない。

先ず短歌だが、『万葉集』卷三・三九六番、笠女郎が大家家

持に贈った三首中の二首目で、大系本は、「陸奥の真野の草原は遠いけれど、心に思えば面影となつて眼前に見える」と世の人はいいますのに。(あなたは近くにいらつしやるのにお目にかかれなるとは)」と訳している。この歌は譬喩(寓喩)歌の部に入つてはいるが、恋の歌である。

一方、東坡詩¹⁴の方は「送運判朱朝奉入蜀¹⁵」と題された、望郷の念を詠んだ詩中の一句である。蜀(四川省)は蘇東坡の故郷で、岷山・峨眉山ともに四川省に聳える山である。この句の意味は「岷山も峨眉山も遠い彼方ではあるが、その遠い彼方の故郷の山にかかる雲と照らす月は、いつもわたしの傍らにあつて離れないのだよ」となる。

この題辞について、後年、市村は「この一七編は遠き国の翻訳なれど、おもかげにして見ゆ、と利かせた」と述べている。¹⁶

つまりこの二首の題辞は、男女の相聞の形をとつて、「(まだ見ぬ)彼方のものをどうか面影に描いてください」という読者へのアピールであり、それに答える形で、「わたし(たち)も、いつも恋しく面影を描いて偲んでいるのですよ」と叙情的に告白しているのだといえよう。

更に付け加えるならば、『森鷗外・於母影研究』グループも指摘しているように、¹⁷ 筆者もまた、この訳詩集『於母影』

には、主宰者鷗外の、そつと隠された切ない想いが潜んでい
るように思われる。鷗外文学の多くの読者が触れるように、
『妄想』には次の一節がある。

自分はこの自然科学を育てる雰囲気のある、便利な国
を跡に見て、夢の故郷へ旅立った。それは勿論立たなく
てはならなかったのではあるが、立たなくてはならない
といふ義務の為に立ったのでは無い。自分の願望の秤
も、一方の皿に便利な国を載せて、一方の皿に夢の故郷
を載せたとき、便利の皿を吊った緒をそつと引く、白い、
優しい手があったにも拘らず、慥かに夢の方へ傾いたの
である。

エリス事件をめぐっては様々な研究がなされ、そのどれも
が推論の域を出ないが、鷗外の後を慕って、はるばる日本に
やって来たドイツ女性がいたのは事実だし、彼がその女性と
結ばれなかったのも事実である。題辞にこめられた彼方への
憧れ、『於母影』全体に漂う郷愁・流離の念、そして断念な
どは、鷗外の密かな切ない内面の告白とは見なせないだろ
うか。

新声社『於母影』グループがそれぞれの形で詩歌を作る
に際して、鷗外が先ず各作品の概略や意味、その叙情性を説

明したことを忘れてはならないであろう。小金井喜美子の回
想がそれを証明している。

お兄様が文字と意味とをいって、それぞれにお頼みに
なります。中には意味だけいって、お自由にと仰しゃる
のもありました。(『鷗外の思ひ出』昭和三一・一)

どのような作品をどのような形で採り上げるかは、鷗外の
選択に委ねられていたのである。そして鷗外が選択した作品
は、いずれも一八〇一―一九世紀西歐ロマン主義・疾風怒濤^{シユトルム・ウツト・ドラマ}
時代のものであった。

漢詩「鬼界島」もまた、望郷、憧れ、そして諦念を詠じた
長編詩である。鷗外の内面の屈折した思いはさておいても、
これらの思いをいかに表現するか、題材に何を選ぶか、そし
て、理解し易い漢詩で、しかも平仄をいかに揃えるか、一語
一語、一句一句が鏤骨の作業だったに違いない。鷗外のみな
らず、「社中の人人がしのばすの池に臨める楼上に夜を徹し
て、此一巻を編」んだ苦心が想像できるのである。

結 論

以上、訳詩集『於母影』中の漢詩「鬼界島」について述べた。

最後に改めてまとめれば、

一、「訳詩集『於母影』」は「何の方鍼もなく捕りて、何の次第もなく集めたるもの」などではなく、徳富蘇峰の呼びかけに応じる形で〈新しい詩歌〉を作ろうとした試みであり、その際、「日本の歌に韻があるかないかと云ふ事の研究」と討論を夜を徹して重ねた、その成果である。

二、「鬼界島」は、市村が右の命題を、平仄を駆使して試みた実験的な作品である。

三、「鬼界島」は、題辞に呼応する形で、憧憬、望郷、そして諦念を叙情的に表現した漢詩である。

四、人々に親しまれている題材を、分かり易い漢語を用いて長編漢詩に作り、散文に近い構成になっている。

五、ストーリー性を持たせることで、読者がカタルシスを味わえるように構成されている。

以上を、拙稿の結論とする。

(助教授 近現代日本文学)

注

1 市村瓊次郎…元治元～昭和二二(1864～1947) 中国史学者。号、器堂。明治二二年、東大古典講習科卒業。学習院講師、教授、東京帝大助教授を経て、同教授。文学博士、学士院会員。井上通泰を介して森鷗外主宰の新社に参加した。

2 『於母影』…訳詩集。森鷗外主宰の文学結社新社編。明治二二年八月「国民之友」夏期附録。韻律を中心に訳詩上の新しい試みが多くなされ、和語・漢語の長所を生かしつつ西欧的情緒を盛り込み、明治の newer 詩を生む母体となった。

3 井上通泰…慶応二～昭和一六(1866～1941) 歌人、国文学者、医師。号、南天莊。国文学者松岡操の三男。実弟は柳田国男。十二歳で医師井上碩平の養子となり、東京帝大医科大卒業後、岡山医専教授などを経て上京し開業医となる。その傍ら作歌や『万葉集』などの研究活動を続けた。森鷗外、賀古鶴所、佐々木

信綱らと常磐会を興し、歌壇に重きをなした。

4 落合直文…文久元～明治三十六年(1861～1903) 歌人、国文学者。

号、萩之家。伊達家の筆頭家老鮎貝盛房の次男、のち幕臣で神職にあつた平田派の国学者落合直亮の養子となる。明治一五年、その年創設された東大古典講習科に入学。同学に小中村義象・萩野由之・関根正直らが出た。一七年、歩兵第一連隊入隊、在

営中、井上哲次郎の漢詩を翻案した「孝女白菊の歌」を発表。鷗外・井上通泰・市村瓊次郎らと新社を結成し、『於母影』を刊行、直文は鷗外と共に「笛の音」(シエツフェル原作)を載せた。文芸評論誌『しがらみ草紙』創刊にも参加した。二六年、本郷区浅嘉町に転居し町名に因んで浅香社を創立、大町桂月・

塩井雨江・与謝野鉄幹らが加わり、一時期は短歌改革運動の指標となった。

5 原田直次郎…文久三～明治三二(1863～1899) 画家。明治一四年東京外語卒。高橋由一らに油絵を学ぶ。一七年ミュンヘンに留学、ドイツ官学派の写実画法を習得し、二〇年に帰国した。留学時代鷗外と親交を結んだ。『うたかたの記』に登場する巨勢のモデルと言われる。

- 6 篤次郎：慶応三〜明治四一（1867〜1908）劇評家、医師。三木竹二。東京帝大医科大学卒業後、日本橋蛸殻町で内科医を開業するかたわら、「歌舞伎新報」の主筆として劇評を連載、劇評家としても活躍した。鷗外と共著で「音調高洋第一曲」「玉を抱いて罪あり」等の戯曲を訳出（のち『美奈和集』に収録）、二二年「しがらみ草紙」創刊に際しては鷗外を助けて奔走し、創刊号から劇評を連載した。三三年「歌舞伎」を創刊、死没まで主宰した。
- 7 喜美子：明治三〜昭和三一（1870〜1956）翻訳家・小説家・随筆家・歌人。鷗外の妹。東京女子師範附属女学校卒業後、東大人類学教授小金井良精と結婚。『於母影』中の「ミニヨン」「わが星」「あしの曲」「あるとき」を訳出した。晩年の『森鷗外の系族』『鷗外の思ひ出』は資料的価値が高い。
- 8 『改訂水沫集』：森林太郎編著。明治三九年五月刊。春陽堂。
- 9 『水沫集』：明治二五年七月刊。春陽堂。
- 10 『森鷗外・於母影研究』：慶應義塾大学国文学研究会編著。昭和六〇年二月刊。
- 11 八坂本云々：同右。
- 12 見ゆとふものを：大系本『万葉集』は「見ゆといふものを」に作る。
- 13 笠女郎：奈良時代第四期の歌人。生没年不詳。万葉集に入集の二九首は全て大伴家持への恋歌である。短歌形式で序詞に富み優艶である。
- 14 東坡：蘇軾の号。1036〜1101中国、北宋の詩人。四川省眉山の人。唐宋八大家の一人。詩風は豪快、才氣に富む。
- 15 『送運判朱朝奉入蜀』：この詩の全文は以下の通りである。
 「送運判朱朝奉入蜀」
 靄々青城雲。娟々峨眉月。随我西北來。照我光不滅。我在塵

土中。白雲呼我婦。我游江湖上。明月涇我衣。岷峨天一。方雲月在我側。謂是山中人。相望了不隔。夢尋西南路。默數長短亭。似聞嘉陵江。跳波吹枕屏。送君無一物。清江飲君馬。路穿慈竹林。父老拜馬下。不用驚走藏。使者我友生。聽訟如家人。細說為汝評。若逢山中友。問我婦何日。為話腰脚輕。猶堪踏泉石。

- 16 ……と述べている：「新声社の頃」「新小説」臨時増刊号、大正一一年八月。
- 17 ……も指摘している：注10書中の「於母影」の世界」264頁。

参考文献

- 復刻「新体詩抄」初編（名著復刻詩歌文学館）ほるぶ、昭和五六年十一月
- 学海居士「夏期附録の評言於母影」（『鷗外全集月報19』）岩波書店、昭和四八年五月
- 「平家物語上」（『日本古典文学大系32』）岩波書店、一九五九年二月
- 日夏耿之介「於母影」（『日本文学大辞典』）新潮社、昭和27年6月
- 井上通泰「落合直文君」（『明星』）新詩社、明治37年2月
- 亀井秀雄「於母影」の韻律—近代詩史の試み—（二）（『文学』）岩波書店、昭和五九年十一月
- 神田孝夫・小堀桂一郎注釈「於母影」（『日本近代文学大系52明治大正訳詩集』）角川書店、昭和四六年八月
- 慶應義塾大学文学研究会編『森鷗外・於母影研究』桜楓社、昭和六〇年二月
- 小堀桂一郎『森鷗外 批評と研究』岩波書店、1998年11月

- 小堀桂一郎『於母影』の訳者たちについて（第3次『鷗外全集一九』月報）岩波書店、昭和四八年五月
- 小堀桂一郎『於母影』訳者考（『図書』267号）岩波書店、昭和四六年十一月
- 小金井喜美子『鷗外の思ひ出』八木書店、昭和三二年一月
- 倉石武四郎講義「漢学・東洋史学」（『本邦における支那学の発達』）二松学舎大学21世紀COEプログラム研究成果報告、二松学舎大学、2006年3月
- 『万葉集卷一』（『日本古典文学大系4』）岩波書店、昭和三二年五月
- 三浦叶「明治の漢文」（『明治文学全集62』）筑摩書房、昭和五八年八月
- 森鷗外「於母影」・「佛に就きて」（『鷗外全集第19巻』）岩波書店、昭和四八年五月
- 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』講談社、昭和五二年十一月
- 大江敬香「明治詩壇評論・明治詩家評論」（『明治文学全集62』）筑摩書房、昭和五八年八月
- 鷗外漁史『改訂美奈和集』春陽堂、明治三九年二月
- 笹淵友一「森鷗外」（『浪漫主義文学の誕生』）明治書院、昭和三三年一月
- 辻揆一「明治詩壇展望」（『明治文学全集62』）筑摩書房、昭和五八年八月
- 矢野峰人「創始期の新体詩―新体詩抄―より『叙情詩』まで」（『明治文学全集60明治詩人集（一）』・同62・（二））筑摩書房、昭和四七年二月
- 内田正男『日本暦日原典第四版』雄山閣出版、平成六年三月
- 『大漢和辞典』・『佩文韻府』・『平仄便覧全』・『漢語大詞典』・『詩韻

含英異同弁